

# 潜在的・顕在的シャイネスと Willingness To Communicate の関連

稲垣 勉<sup>1,2</sup> 石川 保茂<sup>2</sup> 野澤 孝之<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 教育テスト研究センター <sup>2</sup> 京都外国語大学 <sup>3</sup> 富山大学

本研究の目的は、潜在的・顕在的シャイネスと英語における Willingness To Communicate (以下 WTC) との関連の検討であった。19名の大学生を対象に、顕在的・潜在的シャイネスおよび WTC を測定した。分析の結果、潜在的シャイネスが WTC に及ぼす負の影響が有意であり、顕在的シャイネスからの影響はみられなかった。したがって、WTC を高めるためには、潜在的シャイネスを低減させることが有益である可能性が示された。最後に、顕在的・潜在的シャイネスの不一致による影響を検討することを含めて、今後の展望を述べた。

キーワード: 潜在的・顕在的シャイネス, Implicit Association Test, Willingness To Communicate

## 1. はじめに

「恥ずかしがり屋」「内気な人」などの表現があるように、人付き合いを苦手とする人たちがいる。こうした人々が持つ特性は「シャイネス」と呼ばれ、「特定の社会的状況を越えて個人内に存在し、社会的不安という情動状態と对人的抑制という行動特徴をもつ症候群(相川, 1991)」と定義される。シャイネスの高さは孤独感や不安とは正の相関を示し、自尊心やソーシャルスキルとは負の相関を示す(e.g., 相川, 1992; 藤井・澤海・相川, 2015)。

これまでシャイネスの測定には自己報告の尺度が多く用いられてきたが、近年は自己報告によらない方法による測定の試みも行われている。本研究では、近年において研究数が増加している Implicit Association Test (Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998: 以下 IAT) に注目する。IAT の実施には PC を用いることが多く、画面上に連続して呈示される単語などの刺激を分類する課題を通して、特定の概念間の連合を測定する。例えば、シャイネスを測定する IAT は、カテゴリ次元(自己—他者)と属性次元(シャイな—社交的な)に関する刺激語(e.g., 私, 友人, 内気な, 大胆な)が連続して呈示され、各次元に対応するキーを押して分類する。可能な限り速く、正確に行うという教示のもと、カテゴリ次元と属性次元を組み合わせた試行を行い、「自己—シャイな」の組み合わせ課題の反応時間が「自己—社交的な」の組み合わせより速いほど潜在的シャイネスが高い(相川・藤井, 2011)。

Asendorpf, Banse, & Mücke (2002) は、IAT と質問紙を用いて参加者の潜在的・顕在的シャイネスをそれぞれ測定し、異性との対人相互作用場面における行動との関連を検討した。その結果、潜在的シャイネスは参加者の姿勢の緊張の度合いなどを予測した一方、顕在的シャイネスは参加者の発話時間を予測した。本邦では藤井他(2015)が潜在的・顕在的シャイネスと心理的適応の関連を検討し、潜在的シャイネスは身体的攻撃や言語的攻撃と負の相関を示し、顕在的シャイネスは言語的攻撃と負の相関、孤独感とは正の相関をそれぞれ示すといった結果を報告している。

このように、シャイネスは対人コミュニケーションを抑制することが繰り返し示されて

いる。ただし、特に潜在的シャイネスについては、研究の端緒となった Asendorpf et al. (2002) 以降 20 年ほどしか経過しておらず、その研究数は少ない。潜在的シャイネスがどのような指標とどのような相関関係を示すのかについての知見を蓄積することで、潜在的に測定されるシャイネスの位置づけをより明確にすることは有意義であると思われる。

そこで、今回は新たな試みとして、外国語を専門的に学ぶ学生を対象に、「特定の相手と特定の時間に、第2言語を用いて会話を始めるための準備性 (MacIntyre, Clément, Dörnyei, & Noels, 1998, p.547)」である WTC を例に挙げて検討する。外国語を専門的に学んでいる学生の中にも、その言語を用いてコミュニケーションを取ろうとする意志、すなわち WTC には個人差があることが予想される。こうした個人差が、顕在的・潜在的シャイネスとどのように関係するのか、探索的に検討を行うこととする。

## 2. 方法

**2.1. 参加者** 英語を専門的に学ぶ学科に所属する大学生 19 名を対象とした。このうち 1 名は WTC を測定した際の授業に欠席したため、WTC との関連をみる分析からは除いた。

**2.2. 材料** 本研究では、以下の尺度を用いた。

(1) シャイネス IAT 参加者の潜在的シャイネスを測定するため、相川・藤井 (2011) が作成したシャイネス IAT を使用した。(2) Trait Shyness Scale (以下 TSS) 参加者の顕在的シャイネスを測定するため、相川 (1991) が作成した 16 項目・5 件法からなる TSS を使用した。(3) WTC 尺度 参加者の英語を用いた WTC の程度を測定するため、伊藤 (2021) による 12 項目・5 件法からなる WTC 尺度を使用した。

**2.3. 手続き** (1) と (2) は Inquisit Web License を用いて作成したプログラムを用いて、各自の都合のよい場所で測定し、その 1 ヶ月ほど後に行った対面授業の際に (3) を質問紙を用いて測定した。調査実施の際、参加者には、本調査の結果は受講している授業の成績等には一切関係がないこと、回答に正解・不正解はないことを教示した上で協力を求めた。

## 3. 結果

**3.1. 各尺度の得点化** シャイネス IAT は Greenwald, Nosek, & Banaji (2003) による  $D$  得点を求めた。この得点は 0 がニュートラルであり、得点が高いほど「自己—シャイな」の連合が強い。TSS および WTC の各尺度は、逆転項目が含まれる TSS はその処理を行った上で合算平均得点を求めた。いずれも得点が高いほど当該尺度名の傾向が高いことを示す。

**3.2. 各尺度の相関係数および記述統計量** 各尺度間の相関係数および記述統計量を Table1 に示す。TSS とシャイネス IAT の相関係数は中程度で有意であった。また、WTC はシャイネス IAT と有意な負の相関を、TSS とは有意傾向の正の相関を示した。

Table1 各尺度間の相関係数および記述統計量

	1	2	$\alpha$	$M$	$SD$
1 シャイネス IAT	—			-0.16	0.37
2 TSS	.53 *	—	.90	3.02	0.72
3 WTC	-.62 **	-.46 †	.93	3.78	0.81

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , †  $p < .10$

**3.3. シャイネスが WTC に及ぼす影響** WTC を従属変数、シャイネス IAT と TSS を独立変数とした階層的重回帰分析を行った。Step1 でシャイネス IAT と TSS を、Step2 において両者の交互作用を投入した。その結果、Step1 で投入したシャイネス IAT の主効果のみ有意であった (シャイネス IAT, TSS の順に  $\beta = -.53, p = .04$ ,  $\beta = -.15, p = .53$ ,  $R^2_{adj} = .32, p < .05$ )。すなわち、潜在的シャイネスが高いほど WTC が抑制されるという結果であった。Step2 で投入したシャイネス IAT と TSS の交互作用は有意ではなかった ( $\beta = -.22, p = .30$ )。

#### 4. 考察と今後の展望

本研究では、潜在的・顕在的シャイネスと、英語学習者の英語による WTC の関係を検討した。分析の結果、潜在的シャイネスのみが WTC を抑制することが示され、WTC には顕在的シャイネスより潜在的シャイネスの影響が大きいといえる。すなわち、潜在的シャイネスを低減させることで、WTC を高められるかもしれない。稲垣・澤海・澄川 (2020) は、4日間、1日あたり2時間程度、普段より社会的に振る舞うよう心がけて行動した参加者は、潜在的シャイネスが低減することを示した。こうした手法により潜在的シャイネスが低減した場合、WTC にも影響が見られるのかといった点も、今後検討すべきであろう。

また、潜在的・顕在的という2つのシャイネスに不一致を示す参加者もみられた。本研究で得られたシャイネス IAT と TSS の平均値を基準にすると、2つのシャイネスが一致している（ともに高い、あるいは低い）者は11名、一致していない（いずれか一方が高い）者は7名であった。澤海・藤井・相川 (2012) は、2つのシャイネスに不一致がある者は、そうでない者より自己主張性が低いことを報告している。こうした2つのシャイネスの不一致が、WTC や対人相互作用などにどのような影響を及ぼすかの検討も一考に値する。さらには、2つのシャイネスと WTC が、教育学習現場における実際の行動や学習目標の達成にいかに関係するかを探索する意義もあると考えられる。

#### 5. 参考文献

- 相川 充 (1992) 大学生における孤独感と自尊心、シャイネス、社会的スキルとの関係, 宮崎大学教育学部紀要教育科学, 72: 15–26
- 相川 充・藤井 勉 (2011) 潜在連合テスト (IAT) を用いた潜在的シャイネス測定の試み, 心理学研究, 82:41–48
- Asendorpf, J. B., Banse, R., & Mücke, D. (2002) Double dissociation between implicit and explicit personality self-concept: The case of shy behavior, *Journal of Personality and Social Psychology*, 83: 380–393
- 藤井 勉・澤海崇文・相川 充 (2015) 顕在的・潜在的シャイネスと心理的適応との関連——IAT を用いて——, 感情心理学研究, 22: 128–134
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998) Measuring individual differences in implicit cognition: The Implicit Association Test, *Journal of Personality and Social Psychology*, 74:1464–1480
- Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003) Understanding and using the implicit association test: I. An improved scoring algorithm, *Journal of Personality and Social Psychology*, 85:197–216
- 稲垣 勉・澤海 崇文・澄川 采加 (2020) 潜在的シャイネスの低減可能性の検討——対概念の活性化と自己との連合強化を通して——, 鹿児島大学教育学部研究紀要 (人文・社会科学編), 71: 57–66
- 伊藤 健彦 (2021) 関係流動性が日本人の英語 Willingness to Communicate に与える影響, 社会心理学研究, 37: 15–25
- MacIntyre, P. D., Clément, R., Dornyei, Z., & Noels, K. A. (1998). Conceptualizing willingness to communicate in a L2: A situational model of L2 confidence and affiliation, *Modern Language Journal*, 82: 545–562
- 澤海 崇文・藤井 勉・相川 充 (2012) 顕在的シャイネスと潜在的シャイネスの不一致に関する検討, 日本グループ・ダイナミクス学会第 59 回大会発表論文集, 192–193
- 謝辞** 本稿は科研費 (20K14132) の助成を受けた研究成果に基づくものである。

